

人口統計学的変数が お金に対する信念に与える影響

渡辺 伸子*

The Effect of the Demographic Factors on Money Beliefs

Nobuko WATANABE*

Effects of demographic factors on money beliefs was investigated. Adults ($N=669$; Age range 20-69 years) responded to an Internet based questionnaire. Analysis of variance indicated a main effect of age on Negative effects, main effect of marital status on the Counter value of work, and an interaction effect of age and sex on Difficulty of acquisition. There were no effects of age on Positive effects, or Importance. The results of this study suggest that demographic factors have an effect on money beliefs. The need to investigate associations between money beliefs and social opinions are discussed.

key words: money beliefs, demographic factors, age, sex, marital status

問題と目的

お金に対する態度 (money attitudes; Yamauchi & Templer, 1982) とは、お金に関わる際の認知・行動・感情を総合的に個人差として扱ったものと概括されている (渡辺・佐藤, 2010)。お金に対する態度は、就業 (Tang, Kim, & Tang, 2000)、購買 (Hayhoe, Leach, & Turner, 1999) などの生活上の行動と関連することが知られている。

お金に対する態度の人口統計学的な要因による差はこれまでほとんど検討されていない。しかし、大学生とその親を対象に、羞恥を感じやすい領域を検討した磯部・小谷・前田 (2002) では、金銭領域において世代による差が報告されている。このことから、お金に対する態度でも世代などの人口統計学的な要因による差が見られると推察される。

そこで本研究では、社会的状況の指標として人口統計学的変数を用い、お金に対する態度への影響を検討する。お金に対する態度の測定には、大学生用お金に対する信念尺度 (渡辺, 2014) を用いる。当該尺度は、原岡 (1990) による先行の尺度よりも項目数が少ないが、内の一貫性が高い。そのため、回答者への負荷が少ない。尺度は、お金に対する否定的な考えを測定する「ネガティブな影響源」、お金の

対する肯定的な考えを測定する「ポジティブな影響源」、お金の労働の結果だとする考え方を測定する「労働の対価」、お金の入手の難しさについての考えを測定する「獲得困難性」、お金の大切だという考えを測定する「重要性」の5下位尺度で構成されている。尺度は、原岡 (1990) の尺度との関連から併存的妥当性が示されている (渡辺, 2014)。

お金を悪いものとする程度と年齢には負の相関がみられている (Tang, 1992) ことから、「ネガティブな影響源」でも、若年者の方が得点が高い傾向が見られると予想される。その他の下位尺度については参考となる知見がないため予測が難しいが、家庭を持つことで必要となるお金の量が増えることを勘案すると、既婚者と未婚者では既婚者の方が仕事がお金の結果得られるものという考えが強いと想定される。よって、既婚者の方が「労働の対価」の得点が高いことが予想される。残る3下位尺度については、探索的に検討を行うこととする。

なお、大学生用お金に対する信念尺度は大学生への適用しか検討されていないため、尺度が大学生以上の人々に適用可能かについても検討する。

また、本研究は一般成人を想定した調査であるが、居住地に起因した影響が生じる可能性を排除するため、調査対象者の居住地は東京都に限定する。

方 法

調査時期 2012年2月上旬に実施した。

調査対象 東京都に住む20歳~69歳を対象とし、2万500人に調査への協力を依頼した。年代と男女の人数比は東京都の2011年1月の人口を参考にし、10歳刻みで割り付けた。約650名で調査を打ち切った。合計669名 (男性349名、女性320名) が調査に協力した。労働者60.1%、主夫・主婦16.4%、学生4.5%、無職9.1%、その他9.9%であった。

調査内容 ①年齢、②性別、③婚姻状況、④大学生用お金に対する信念尺度 (渡辺, 2014)。尺度は、全30項目、5件法であった。

調査方法 調査の実施は株式会社クロス・マーケティングに委託し、web上で実施した。

倫理的配慮 調査は、著者の所属機関に設置された研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

結 果

大学生用お金に対する信念尺度が一般成人にも適用可能か確認するため、30項目に対し、渡辺 (2014) と同様に因子数を5に固定した因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を施した。その結果、渡辺 (2014) と同じ5因子が再現された。しかし、「お金より大事なものなど、この世にはないと思う」については、「ポジティブな影響源」因子に対する因子負荷量が.23と低かった。一方で、他の因子

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki
305-8577, Japan
現所属: 中部学院大学 地域連携推進センター
Center for Regional Collaboration in Research and Education,
Chubu Gakuin University, 2-1 Kirigaoka, Seki-shi,
Gifu 501-3993, Japan

Table 1 大学生用お金に対する信念尺度の平均値と標準偏差（全体および年代・性別ごと）

		全体	20代		30代		40代		50代		60代	
			N	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
ネガティブな影響源	M	3.34	3.42	3.55	3.52	3.52	3.28	3.47	3.08	3.17	3.05	3.17
	SD	0.82	0.93	0.84	0.87	0.86	0.79	0.79	0.77	0.76	0.65	0.71
ポジティブな影響源	M	3.48	3.50	3.43	3.48	3.64	3.45	3.62	3.28	3.50	3.40	3.48
	SD	0.70	0.79	0.82	0.73	0.59	0.67	0.69	0.89	0.63	0.59	0.55
労働の対価	M	3.82	3.69	3.79	3.89	3.85	3.64	4.03	3.74	3.81	3.89	3.87
	SD	0.69	0.82	0.86	0.67	0.55	0.64	0.67	0.88	0.59	0.63	0.51
獲得困難性	M	4.08	4.01	4.01	4.14	4.09	3.89	4.24	4.06	4.08	4.14	4.10
	SD	0.74	0.78	0.97	0.77	0.77	0.74	0.69	0.81	0.68	0.54	0.50
重要性	M	4.24	4.23	4.20	4.26	4.42	4.06	4.45	4.04	4.19	4.25	4.25
	SD	0.70	0.78	0.98	0.77	0.50	0.67	0.61	0.86	0.56	0.55	0.52

への負荷量は.23以下であったため、渡辺(2014)と同様に得点化した。全体および年齢、性別ごとの平均値と標準偏差をTable 1に示した。また、各年代において α 係数を算出し、尺度の信頼性を確認したところ、すべての下位尺度がすべての年代で.81以上の値を示したため、尺度の信頼性は十分であると判断した。

次に、性別、年代、婚姻の有無がお金に対する信念尺度の得点に違いをもたらすか検討するため、性別(男・女)×年代(20・30・40・50・60代)×婚姻状況(未婚・既婚)の3要因の分散分析を行った。分析にあたり、婚姻状況が既婚死別と既婚離別の者を除いたため、分析対象者は627名となった。分散分析の結果、「ネガティブな影響源」で、年代の効果が見られた($F(4, 607)=4.06, p<.01$)。多重比較(Bonferroni法)から、20代や30代の若い人々は、50代の人々よりも得点が高いことが明らかになった。また、「労働の対価」では、婚姻の効果が見られ、既婚者の方が未婚者よりも得点が高かった($F(1, 607)=6.01, p<.05$)。加えて、「獲得困難性」では、年代と性別の交互作用が見られた($F(4, 607)=22.45, p<.05$)。単純主効果の検定から、40代において、女性の方が男性よりも得点が高いことが明らかになった。「ポジティブな影響源」と「重要性」には、性別、年齢、婚姻の有無の効果は見られなかった。

考 察

本研究では、人口統計学的変数がお金に対する信念に与える影響を検討した。

一般成人への尺度の適用を検討したところ、因子分析と α 係数の点から、尺度が一般成人にも適用可能であることが示された。

人口統計学的変数がお金に対する信念に与える影響が3点確認された。「ネガティブな影響源」では、予想通り、年代の効果が見られた。20代、30代の人々の方が50代の人々よりも得点が高く、若年者の方がお金を悪いものだと認識していた。また、「労働の対価」でも、既婚者の方が、お金は仕事の結果得られるものだと強く考える傾向にあり、予測と合致した結果が得られた。加えて、探索的に検討を行った3下位尺度のうち、「獲得困難性」で年代と性

別の効果が見られた。「獲得困難性」は40代において、女性の方が男性よりも得点が高かった。40代では、男性は職業の継続により賃金が安定しているが、女性は出産や育児による退職を経験していることが多いと考えられる。そのため、40代において性差が見られたと考えられる。

「ポジティブな影響源」と「重要性」では、人口統計学的変数による差は見られなかった。このことから、お金への肯定的な態度は、社会的状況に関係なく形成されているものと考えられる。

本研究の結果から、社会的状況によってお金に対する態度の一部に差が見られることが示された。これらの差により、社会的な意見の対立がもたらされる可能性も想定される。そのため、今後は、お金に対する態度と社会的な意見の関連を検討することが有益と考えられる。

なお、本研究の調査協力者はweb調査に協力する経済的基盤や心理的特徴を持ち合せた人々であるため、何らかの偏りを有する可能性がある。今後は他の方法による調査も必要である。

引用文献

- 原岡一馬 1990 お金に対する態度と価値志向I—態度の構造と態度尺度の構成— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 199-216.
- Hayhoe, C. R., Leach, L., & Turner, P. R. 1999 Discriminating the number of credit cards held by college students using credit and money attitudes. *Journal of Economic Psychology*, 20, 643-656.
- 磯部美良・小谷 梓・前田健一 2002 大学生世代と親世代の羞恥感情の比較検討 広島大学心理学研究, 2, 141-149.
- Tang, T. L. P. 1992 The meaning of money revisited. *Journal of Organizational Behavior*, 13, 197-202.
- Tang, T. L. P., Kim, J. K., & Tang, D. S. H. 2000 Does attitude toward money moderate the relationship between intrinsic job satisfaction and voluntary turnover? *Human Relations*, 53, 213-245.
- 渡辺伸子 2014 大学生用お金に対する信念尺度の作成 応用心理学研究, 40, 11-22.
- 渡辺伸子・佐藤有耕 2010 お金に対する態度に関する心理学的研究の動向 筑波大学心理学研究, 40, 61-71.
- Yamauchi, K. T., & Templer, D. I. 1982 The development of a Money Attitude Scale. *Journal of Personality Assessment*, 46, 522-528.

(受稿：2015.3.27；受理：2016.2.29)